

2022 年度 海外研究員成果報告書

人文学部 教授 玉田 敦子

出張期間

2022 年 3 月 31 日～7 月 27 日

2022 年 9 月 21 日～12 月 22 日

2022 年 12 月 26 日～2023 年 1 月 19 日

2023 年 3 月 21 日～3 月 30 日

(2022 年 7 月 28 日～9 月 20 日、12 月 23 日～25 日、2023 年 1 月 20 日～3 月 20 日は、パリとジュネーブにおいて科研費基盤研究 B の資料調査と研究打ち合わせを遂行した。)

研修先

Le Laboratoire STL, Université de Lille, 59653 Villeneuve-d'Ascq, France

研究課題

近代の創出における古代表象の利用

研究内容・成果

本研究課題「近代の創出における古代表象の利用」は、2019 年に採択された科学研究費基盤研究 B 「近代国家の文化的アイデンティティ形成における古代表象の諸相」(研究代表者 玉田敦子) の集大成となる研究をすることを目指して着手した。滞在中は、招聘をいただいたリール大学、ガブリエル・ラディカ教授をはじめ、第一線で活躍する近代フランス思想・文学研究者の協力を得ることができた。具体的にはリール大学古典資料センター、フランス国立図書館、ジュネーブ大学図書館における資料調査をおこなひ、18 世紀フランスにおいて古代ギリシア・ローマの思想や文芸が、近代国家の文化的アイデンティティの基盤として利用された経緯を検討した。

そこで主に明らかにされたのは、ヨーロッパの近代国家が形成される過程において古代ギリシア・ローマの表象が利用された背景には、歴史記述の再構成による文化的アイデンティティの「アプロプリエーション〈盗用的利用〉」の側面があるという点である。本研究では、近代のフランスにおいて古代表象が有する特権的な価値、中でも「崇高」や「英雄性」といった男性的な価値が国家の文化的アイデンティティの基盤と考えられていた点に着眼し、考察した。本研究の成果に関しては、2023 年 8 月現在、未公開の内容もあることから概略の記述にとどめるが、以下の形での公表を進めている。

I. リール大学における研究集会の開催とその成果 (2022 年 11 月 28 日/29 日)

・2022 年 11 月 28 日～29 日にかけて、招聘先のリール大学において、ガブリエル・ラディカ教授と共に「ディドロと美学」をテーマとした研究集会を開催し、「ディドロと崇高美学」という題目にて研究報告をおこなった。研究集会には、リール大学に所属する近代文学、および古代ギリシア・近代思想研究者に参加をいただき、今後着手する共同研究について議論をおこなった。この研究集会では、ご参加いただいたリール大学キャロリーヌ・グラバ教授から、同ソフィー・アッシュ教授、ナント大学ドミニク・ルボルニュ教授、トゥールーズ大学ステファン・ピュジョル教授と共に、リール大学博士課程のオード・ルサンブル氏の学位論文「ディドロと崇高の効果」の審査に加わることを要請されたため、2023 年 6 月 2 日の審査にオンラインにて参加、報告書を作成した。この研究集会と博士論文審査においては、アッシュ教授、ルボルニュ教授ら、崇高研究

において単著書籍を刊行している専門研究者の議論によって、18 世紀における崇高の思想に関して多様な視点から考察を深めることができた。

II. 2023 年 7 月の国際 18 世紀学会大会におけるセッションの開催と基調講演

・2023 年 7 月にローマで開催される国際 18 世紀学会世界大会は”Antiquity and the shaping of the future in the age of Enlightenment”を大会のテーマとしていることから、この大会において「Rousseau et l’Antiquité : comment faire du neuf avec l’Ancien (ルソーと古代：いかに近代は構築されたか?)」という題目のセッションを企画した。2022 年 9 月の企画申請にあたっては、ラディカ教授、ジュネーヴ大学のマルタン・リュエフ教授、ソルボンヌ大学のセリーヌ・スペクトール教授、また科研費基盤研究 B の分担者を務める福岡大学井関麻帆准教授に登壇いただき、パリとジュネーヴにおいて研究打ち合わせを重ねた。本セッションは 2022 年 10 月末に採択され、他の登壇者と共に発表内容を準備したが、大会のテーマが偶然、2019 年に採択された科研費基盤研究 B の研究課題と一致していたことから、本研究課題に関しても最大の成果発表の場となった。ローマ大会のセッションでは 2023 年 7 月 4 日に« Pourquoi le sublime produit-il un si grand effet ? » : Rousseau et Longin という題目にて、ルソーの『サヴォアの叙任司祭の告白』における崇高の観照の訓練にはロンギノスの『崇高論』の認識論が応用されている点を中心に報告した。

・さらにローマ大会においては、2023 年に国際 18 世紀学会の副事務局長に選出された科研費共同研究者の隠岐さや香東京大学教授とともに、国際 18 世紀学会執行委員のメンバーとして、渡辺浩東京大学名誉教授を筆頭著者とする基調講演、The Makings of Antiquity : Japanese Experience in the Seventeenth and Eighteenth Centuries をおこなった。

III. ジュネーヴ大学における Annales Rousseau の特集号の刊行

・上記の国際 18 世紀学会世界大会におけるセッション「ルソーと古代：いかに近代は構築されたか?」に関しては、ジュネーヴ大学のリュエフ教授と共に「ルソー研究 (Annales de la Société Jean-Jacques Rousseau)」の特集号を編纂中である。

IV. 国際共著・単著書籍等の刊行

・本研究の成果に関しては、中国の国家アカデミーである中国社会科学院から今夏刊行される国際共著書籍『十八世紀世界的同步性：习俗、社会和优雅』（中国社会科学出版社）、また『啓蒙思想の百科事典』（丸善出版、2023 年 2 月）の項目「修辞学」「書簡」「崇高」にまとめたほか、単著書籍『崇高と近代』を執筆している。単著書籍に関しては、本年度中の完成を目指している。

(2023 年 4 月 20 日作成、8 月 18 日修正)